

---

# タロットDEATH!!

桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タロットDEATH!!

### 【Nコード】

N2211X

### 【作者名】

桜

### 【あらすじ】

最強の魔法具。タロットカードを手にする天才と言われた若き魔女。

タロットカードを狙う人間達から逃げ回り、少女はある島国に逃げ延びる。

少女、ラフィーはそこで一人の少年と出会った。

死神のカードに魅入られた少年明菜と、力を無くした少女ラフィーの物語。

## 一話・タロットカード

冷たい風が吹く。

闇が広がる世界に二人の少女が居た。

二人の少女は夜の闇の中、空に浮いている。

暗い中も、下からの人工的な光が二人の顔を映し出していた。  
お陰でお互いの顔を確認することは出来る。

片方は赤い瞳で睨み付け、片方は澄んだ青い瞳で悲しむように見つめる。

二人の少女は互いに変わった格好をしていた。

赤い瞳の少女は淡い青色のマントをたなびかせ、大きな黒い三角帽子を深く被り箒に跨っている。

淡く光る箒はその少女の力によって空に浮いているようだ。

典型的な魔女の格好をした少女は、赤く鋭い瞳を向け、もう一人の少女を憎憎しげに睨む。

かたやもう一人の少女は黒いコートをすっぽりと上から被り、金色の髪がフードからこぼれている。

少女は箒に乗っているわけでは無く、また別の力で空を飛んでいた。

三角帽子の少女とは違い、コートの少女は優しさの残る青い瞳をフードから覗かせていた。

二人は魔法学校の同期。

フードの少女が首席で卒業し、三角帽子の彼女は二番手で卒業した。

卒業から一カ月後。

彼女達は夜の闇で出会っていた。

「やっと見つけたわよ、ラフィー」

ラフィーと呼ばれた青い瞳の少女は、困ったように一瞬下を向いたがすぐに視線は戻る。

「アリア……私達、友達だよね……？」

ラフィーが呼んだ声は不安の色が見て取れた。

その言葉にアリアは表情を歪ませる。

「友達！？ そんな事思ったこと無いわよ！！ アンタは私にとって只邪魔な存在！！ 絶対に殺してやる！」

吐き捨てるような言葉が、友だと思っていた少女から放たれラフィーは肩を震わせる。

「そんな……」

悲しそくに青い瞳を再び下に向ける。

アリアが自分を見る怒りの視線に耐えられなくなったのだ。

彼女はアリアを友人だと思っていた。

学校では良く喋り、苦肉を共にした仲だと……思っていた。

「……アンタが常に一番で私が二番……アンタさえいなければ首席は私の物だったのに、その『力』も……！」

彼女はとても努力家だったのをラフィーは知っている。

それを一番近くで見ていたからこそ、彼女の怒りの矛先がラフィー自身に向けられたのも解る気がする。

それでも……ラフィーはこの状況を信じたくないでいた。

「アンタを殺してその『力』……『タロット』を奪う！！　そして、私が一番になるのよ！！！」

アリアは箒の上に立ち上がると、右手を憎い元友人に向ける。

向けた手の掌を中心に淡い光が零れる。

その光は集まっていくと一本の大きな槍が出来ていた。

光は立続けに零れ、大量の槍が現れていく。

彼女の魔法によるものだ。

古臭い装飾が施された無数の槍が闇の中キラキラと輝く。

光る齒はラフィーの方を向き、殺意が……輝いているようであった。

それが本気である事を示しているかのようだった。

「心臓を貫け！　脳を潰せ！　内臓を！　肺を！　神経を！　奴の全てをブチ壊せエエエ！！！」

叫び声と共に無数の槍がエレの方に飛んだ。

「アリア！！　そんな！！　嫌だよ！！！」

ラフィーは悲しみの叫び声を挙げながら懐に手を入れる。

絶望の声を溢している自分とは別にスグに対処しようと体が動く。

ラフィーは友達となんか戦いたくない。

だけど、こんな所で死ぬわけにもいかない。

取り出したのは一枚の古臭いカード。

女性が坪から水を零しているような絵が施されているカードだ。

ラフィーは掲げると澄んだ声を空に響かせる。

「方向は正常！ カードは星！！ 『女神の守福を！』」  
言葉と共にラフィーの目の前に青い光の壁が展開された。  
壁に描かれた大きな六芒星が静かに回っている。

ガガガガガガ！ と、けたたましい音と共に光の壁に槍が衝突していく。

すさまじい音が鳴り響く中、光の壁は一向に傷つくことは無かった。

逆に無数の槍達は壁に当たる度、粉々に砕けていく。

「つぐううう！」

槍が全て消えると共にアリアは悔しそうな声を漏らしていた。

青い壁はラフィーを覆ったまま、光の壁に傷一つつける事すら出来なかったのだ。

「最強の魔法具……最古のタロットカード、位置や効果で様々な力を発揮し、持つ物には強者の栄光を齎せると言われる……お、お前何かはその力を使いやがってエエエエ！！」

憎悪と怒りが込められた叫び声はラフィーに降りかかる。

汚らしい人間の欲望を露にするかのようにアリアは叫んでいた。

「違うの！ このカードはそんなのじゃ……！！」

そんな友人の姿にラフィーも絶望していた。

何故こんな事になったのか、ラフィー自身は友達にこんな仕打ちをされたのが辛すぎたのだ。

誰もラフィーが持つタロットカードの本来の存在の事を知らない。

栄光を齎すと言われたタロットカード。  
不死を手にすると言われたタロットカード。  
死者を生き返らせるといわれたタロットカード。  
様々な噂はどれもが正解で、どれもがズレていた。  
だがそれを知っている持ち主のラフィーの気持ちなど、アリアには知る由も無い。

「黙れ黙れ黙れ……」  
ラフィーの言葉に聞く耳持たぬと言わんばかりにアリアは首を大きく振った。

「その力を……寄こせ寄こせ寄こせよオオオオ！」  
今度は片手では無く、両手を向ける。

アリアの周りが赤く光っていく。  
その姿を見てラフィーは目を見開いた。

（あの光は……ドラゴンの息吹を召喚する気！？）  
その魔法が全てを破壊し、塵一つ残さない事をラフィーは知っていた。

しかし、その術はあまりにも強力であり、そして覚えるのに何十年と掛かると言われている事も。

その意味合いが、アリアの努力の姿が伺える。  
若干の若さでその術を手にした『少女』は紛れも無く天才。

アリアの自身に満ちた笑みと共にドンドン膨れ上がる赤い光。

闇の世界が強く照らされ、邪悪な笑みを浮かべるアリアがハッキリと見て取れる。

そして。

両手から、赤い光が放たれた。

巨大な大きな光が、闇の世界を照らす。

「燃え落ちろオオオ!!!」

憎しみの声と、憎しみを込めた真つ赤な光がラフィーに向い伸びて行く。

しかし。

ラフィーの表情は驚きが残っただけで、恐怖の色があるわけでは無かった。

驚きの瞳は、スグに哀れみの瞳へと変わっていた。

アリア。彼女は紛れもなく、何百人に一人の天才。

しかし、ラフィーは何千人に一人の天才だった。

「……アア。本気なんだ」

天才は小さく零した。

その声には覚悟が込められる。

赤い光が放たれたと言うのに守りの青い壁はとっくに消え去っている。

守りが無い形でラフィーの体は曝け出された状態。



迫り来る赤い光に動じる事無く、ラフィーは懐から一枚のカードを取り出した。

吊るされた男が施されている絵が描いてあるカード。

努力が報われるという意味を持つカード。

「位置は逆位置、カードは吊るされた男……『ザ・ハングドマン』」  
逆位置で掲げられたカードに呼応する様にラフィーの前に、今度は網目状で緑色の壁が出来上がった。

そして網目状の大きな壁に、赤い光が衝突した。

（今度こそ殺してやる！ 最上級の魔法具なら最上級の魔法で対応するだけだ！！ 何を出したか知らないが、今度のは壁何て関係無い破壊の力！！ 壁ごとぶっ殺してやる！！）」

不気味な笑みを浮かべ、アリアは手をかざし続ける。

反動で焼け爛れて行く両手も気にせず。

血の滲むような努力をし、膨大な知識を手に入れ、死ぬ気で覚えた最上級の魔法。

この女を倒す為と毎日を費やした努力がようやく実を結ぶと思つと無意識に頬が緩む。

既に、勝ちを誇っていた。

しかし。

アリアの予想とは違っていた。

巨大な赤い光の玉は、大きな音を立てることも無く緑の壁に呑み込まれていっていた。

アリアの努力を嘲笑うかのように、緑の壁の真ん中に闇夜より黒

い穴が呑み込んでいる。

ブラックホールを思わせるような、どす黒い穴が何なのかも何処に繋がっているかもアリアには解らない。

赤い光はやがて無くなり、全てが闇の先に消えていった。

「な、何よコレ……！」

アリアの表情から笑みは消えている。

只々愕然と何も無くなった空夜を眺める。

光は消え去り空には再び闇が広がる。

焼け爛れた手は、確かに巨大な魔術を作り出した筈なのに。

「……自分の努力を自分の肌で感じると良い」

ラフィーが小さく声を漏らす。

その声は酷くアリアの耳につく。

「こうでもしないと引かないと言うのなら私は非情になる……！」

ラフィーは顔を挙げる。

青い瞳は決意を込める。

友達を攻撃する決意を。

心優しい彼女にはそれは大きな決意。

先程のアリアの様にラフィーは緑の壁越で両手をかざした。

すると緑の壁の真ん中に大きな穴が開く。

穴の先は暗い。

先程のと同じドス黒い色。

「……こ、これは！」

アリアの背筋に寒気が走る。

暗い穴の先が、徐々に赤く光りだしたのだ。



る。

赤い髪を風に揺らせる姿は美しい少女であることが解らせた。プスプスと、何とか燃えきっていない筈の上で苦しそうに顔をゆがめていた。

彼女が助かったのは帽子に込められた魔法のお陰ではない。

それはアリア自身が良く解っている。

この魔法を必死に勉強したのだ。

良く解っているのだ。

この魔法を受けて無事で済む筈が無い事を。

それは、ラフィーがアリアの力を、態々弱めて放ったからだ。

「な、何で……殺さないのよ!!」

震える声を挙げる彼女に、ラフィーは目を伏せたまま答える。

「……友達を殺すわけ無いじゃない」

「……ッ! ぐうう! うううう〜!!」

アリアは悔しそうに呻く。

ラフィーが力を弱めた事もそうだが、自分の努力の結晶を。

難解な大魔術を。

ラフィーはいとも簡単に手を加えて死なない程度に弱くして……

返してきた事が解ったからだ。

その行動が正に無駄な努力だと言われたようで、アリアの心を大きく傷つけていた。

「……まだやる?」

無傷である天才少女の哀れみの目から逃げるようにポロボロの少女は吼える。

「やるに決まってるじゃない！！ アンタのそういう所が昔から嫌いなのよ！！ 私を見下すなアアア！！ 殺してやる！！ 絶対に殺してやる！！」

そう叫びながらも、綺麗な顔にはポロボロと涙が零れていた。

こんな屈辱的な負けは認めない。

怒りと憎しみが入り混じり、そんなアリアの表情に……ラフィーは再び目を伏せる。

ラフィーは、何がどうあると、もうアリアを傷つけたくなかったのだ。

大切な親友を。

だからこそ、嫌われてでも、もっと非情になる覚悟をしている。

「解った…だったら次は『死神』を使う事にするわ……」

そう言いながら取り出したのは、如何わしいドクロがでかいカメラを持った絵が記されたカード。

それを見た途端、アリアの表情が変わった。

憎しみの籠った瞳は恐怖の色へ変わり、怒りに歪んでいた顔は真っ青になり、驚愕へ。

「し、死神のカード……タロットカードで最も危険な、全てを無にする最凶のカード……」

慌てて箒に跨ると踵を返した。

死よりも恐ろしい無を作り出すと言われている伝説級の力。

タロットカードの力の核になっているとまで言われているソレを、  
アリアは知っている。

死は怖くない、しかし、そのカードの恐ろしさを知っていて、体  
が勝手に震えるのだ。

「つぐううう……！」

「……」

悔しそうに呻き声を挙げるアリアをラフィーは澄んだ瞳で見つめ  
る。

「今日は下がるわ……だけど、次は、次こそは殺してやるから！！  
！　つづ……くそ……くそう……うう」

捨て台詞を吐くとヨロヨロと火がくすんだ筈で飛んでいく。

闇夜に煌く雫はアリアからポロポロと下界へと零れていく。

ゆっくりと飛ぶ姿は痛々しく、やりすぎた、とラフィーは顔をし  
かめる。

アリアは本当に仲の良い一人だった。

それを変えたのは、全てこのタロットカードだと言う事をラフィー  
は知っている。

魔法学校を首席で卒業したラフィーが課せられた任務は、この伝  
説のカードを守る事。

手にした物は世界をも手に入れれるとまで言われた最強の魔法具  
は誰もが奪おうと手を伸ばす代物。

願いが叶う、人を生き返らせる、永遠の命が手に入る。

様々な伝説は、人が欲望に染まるのには十分すぎるものだ。

それを正當に扱える唯一の者がラフィーと言われ手渡されたのだ。

一人故郷から離れ、こんな孤島の島国まで来たのに、『また』襲われた。

久しぶりに会えた友人までもが欲望に塗れ襲ってきたのだ。

(孤独な中で、アリアに久しぶりに会えた事……とても、とても嬉しかったのに……)

ラフィーは目に薄らと涙を浮かべていた。

魔法使いになって沢山の人を救うのがラフィーの夢であった。

(何故こんな物を守らなければ……)

沢山の欲望もラフィーの前では誰も敵ではない。

だけど、そんな汚い物を守る為に魔法使いになったつもりは無い。

一人残された夜空を後にし、フラフラと飛び立っていく。

(それにしても死神のカードを使わなくて良かった……あれは私もまだ使い切る事が出来ないんだから)

一話・タロットカード（後書き）

中二病小説ですドウゾ宜しくw



## 二話・目つきの悪い少年、明菜

目が覚める。

何か妙な夢を見た。

夢という忘れやすいものは少年の脳裏からスグに薄れていった。

可愛い女の子が二人ほど出てきたのは覚えているようだが、それ以上は何も覚えて居ない。

一度自分の部屋に視線を巡らし、ボケーっとしながらも頭をゆっくりと動かそうとする。

(……どうせ夢なんだつたらパンツぐらい見せてくれよ)

最初に動き出した脳が考えたことはバカっぽい意味合いだった。

思春期特有の変態じみた考えを持っているが彼はこれでも寺の人間だ。

「明菜アアアアアアアー!!!」

遠くから聞こえる少年の名前を呼ぶ声に少年はめんどくさそうに溜息を溢す。

呼んでいるのは彼の親でもある住職だ。

もそもそと立ち上がると彼は声の方に向かう。

(朝飯作って……学校……いかネーと……)

彼の家では母親が良く出払っているから明菜が朝飯を作っている。

坊主の息子のクセに目つきが悪く口が悪いが、彼は生真面目な少年だ。

「呼んだらスグに来やがれボケ息子がアアアアアアアー!!!」

住職の格好をした中年がいきなり部屋に入ってきたかと思と、声を張り上げながら明菜に走った。

「へぶつ!？」

見事にラリアットが命中。

ハゲの中年の逞しい腕が明菜を襲った。

「ゲホ! ゲツホ! 朝っぱらから何すんだテメー!」

「貴様また喧嘩をしたらしいなア! お父さん悲しい!! 何故お前は人を愛せぬのだ…… スグに暴力で訴えることを菩薩様も御求めになられていない!! アア…… お許してください…… どうか地獄だけは」

「菩薩さアアアん!! このハゲ地獄に落としてエエエ! コイツ言ってる事とやってる事ミスマッチなんですけどオ! 可愛い息子に暴力振るつたんですけどオ!!」

怒り狂った声を張り上げても坊主は今もこの世に存在しているようだ。

明菜の怒りの言葉も菩薩に届くことは無いらしい。

「コレはお前についてる悪霊を追払う為、後教育も兼ねての暴力行為だからいいんだよ」

「つく! 昔っから悪霊追払うだの何だの坊さんらしいこと言っ  
てイチャもんつけやがって!!」

「お前は寺の息子のクセに昔っから悪霊とかに好かれる傾向がある  
からの」

とか何とか言いながら明菜の父は遠い目をしている。  
酷く白々しい。

「菩薩さアアアん！！　コイツ当り前のように嘘つくんだけどー！  
この世から消して舌抜いちまってエエエエ！！」  
折角明菜が天に向かって叫んでいるのにハゲはやはりまだ存在している。

遅しい腕で第二陣を明菜に放とうとしている感じでとても元気な様子だ。

「グツホア！？」

ボディーに第二波命中。

悶絶している明菜など知らずに父親の説教は続いている。

「全く何故お前は喧嘩ばかりするのだ……ワシはお前を悪に染めたく無いんじゃ……あ、後悪霊にとりつかれて欲しく無いんじゃ……」  
明菜は苦しみながらも最後の付け足した感は聞き逃さない。

（本当にこの世に悪霊が存在するならこの怪力ハゲを殺してくれエエエ……）

「我が家の家訓は『恩を返す』その家訓に恥じぬ立派な男になって欲しくてだなー」

まだ回復していない明菜に延々と父親の説教が続く。

（つつーかよ……お、俺は家訓通りに動いただけなんだが……）

クラスでお世話になってる女子が絡まれていたから助けた。

明菜という少年は、現代で珍しい少年だ。

不良っぽい言動や外見で彼を知らない人間は勘違いしてしまうが、  
仁義に熱く、義理を守る。

家訓を重んじる古風な人間だが、そんな彼を知らない一般人からは良く恐れられている。

父親の勘違い等、いつもの事で言い訳なんぞしても『男が良いわけするなー!』と怒る理由が変わるだけなのを明菜は良く知っている。

「だからといって学校が遅刻する時間くらいまで説教するってどうよ!?!」

いつも出る時間から10分以上過ぎている。

「うむうむ、仏の道を説くというのは大変であってだな」

ハゲ親父は悪びれる様子はない。

だがそんなのを確認している時間すら惜しい。

「ウルセー! 俺は行くからな!」

「ま、待て明菜!」

慌てて出ようとする、後ろからハゲ親父が呼び止めてきた。

「何だよ! まだ怒り足りねーのかよ!?!」

「いや、朝食がまだなんだが」

「テメーのせいで遅れてるんですけど!?!」

「我が家の家訓は『恩を返す』……お前を育てるのは大変だったな  
| ……」

「血も涙もネーとはこのことだよ!?!」

踵を返して家に戻る。

遅刻は確定である。

明菜はちょっと泣きそうになっていた。

### 三話・出会い（前書き）

「完全遅刻だよクソがー!!」  
慌てて寺の門を開けてダッシュで飛び出す。

「しっかり勉強して来るんじゃぞー」

「ウルセー!! クソハゲー!!」

父親の発した言葉に振り向きざまに中指を立てて悪意を思いつき  
り向けてみせる。

それを見てハゲ親父は眉を潜める。

「アイツー……今日死相が出とるのー……」

そう、ぼそつと零したハゲ親父の視線には息子が行った後にウヨ  
ウヨと黒くまがまがしいモノが視えていた。

「昔っからアイツは悪霊に好かれるからのー……」

そういった父親の視線は慌てている様子は無く、淡々と穏やかな  
表情をしていた。

### 三話・出会い

「あなた、今日死にますヨ」

突然そんな不機嫌極まりない言葉を道端で吐かれた。

明菜は当然、めいっばい不機嫌な気持ちになり、その不機嫌も力いっばい顔に表した。

朝っぱらの眠たい登下校、遅刻もしているというのに明菜の気持ちにはストレスが溜まる一方なようだ。

家の出来事ですでにストレスゲージはとんでもないことになっているのだが。

いつも使う登校する道に、見慣れない物が存在していた。

小さな机と椅子をを道の端に座っている黒い物体？

いや人間だ。

ローブと言えば良いのだろうか。

そんな黒い服を纏った人間がいた。

フードをすっぽりと被っていて顔は見えない。

体は小柄に見える。

そんないつもとは違う異様な光景は、非日常的で。

周りの朝から忙しそうにしている学生や社会人もその非日常に視線を向けてはいたが皆立ち止まらずに素通りしていた。

当然明菜も素通りするつもりだった。

黒い存在に関わらないように素通りしようとした時。

黒い物体から声がしたのだ。

それがこの一言。

『アナタ、今日死にます』

ふざけた片言だが可愛らしい少女の声で確かにそう言ったのだ。タイミングよく明菜が目の前にいたときに言ったのだから明菜に向けて言ったのは間違いない。

だが今日自殺する気も殺される程の恨みもサラサラ無い明菜としては予想外の事に立ち止まったというより、固まってしまっていた。

いぶかしそうに見つめる明菜にフードの女は唯一見える口の部分を、ニンマリと笑って見せた。

「どうですか？死にたくなければ占いで運命を見てみるとカ」

何やら覚束ない日本語で言った言葉は、よくわからない意味であった。

「占い？」

ひょうしぬけな言葉に、明菜もついつい妙な声をあげてしまっている。

よくみると女が座っている所に小さな看板でタロット占いと、書いてある。

そこでようやく女の言っている意味が解った。

さっきの言葉はただの商売の常套文句だと理解する。



(なんつーガラが悪い常套文句だ……)

そうとわかればここにいる意味はない。

(さっさと学校行こーっと)

座り直して何やらワクワクしてる女を完全にスルーして先を急ぐ事にした。

(しかし今日死にます、て……とんでもない客引きだな)

確かに誰でも足を止めそうだ。

歩き出そうとしたとき、服の裾を引っ張る感覚で進むのをさえぎられた。

「……？」

何が引っ張っていたのか気になったが、やはり先を急ぐので明菜は力任せに再び歩き出す。

対した力では無い様で、引きづる感じそのまま歩いた。ズルズルという布を引きずる音が聞こえる。

「ちょ！ 待って下さい！ 止まって下さいー!!」

片言で必死な感じで呼び止められている。

取り敢えずその言葉で立ち止まってしまった。

ついでに後ろを振り向いてみると、引っ張っていたのは先ほどの黒いローブの人間。

……ひきずったせいで多少砂が付いているが。

この少女、凄く非力らしい。

「な、なんで行きますか?!あなた死ぬ怖くないですか!?!」

振り向くと共にキーキーと高い声で騒がれても耳障りなんだが、なんて失礼なことが明菜の脳裏に過ぎる。

周りのめんどくさそうな目が明菜にも向けられているようで気分は良くない様子。

「そんな脅し臭い商売文句で誰が占ってもらったの」「捨てせりふと共に取り敢えず再び視線を戻して前に進んだ。

力はさほどないので引つ張られながらもひきづるかんじて進んだ。女の子はひきづられながらも諦める様子はない。

必死に明菜の裾を引つ張りブレーキをかけようとしている。砂煙はその努力分は出ているが、その努力も空しく体格差がズルズルと再び引張られる感じになる

「なんでですか! なんでですか?! 日本人、親切聞きました! なのにワタシ商売成功しません!」

引つ張っている時もキーキーと五月蠅い……。

(というより、こいつ外人なのか……嘘臭い片言はマジだったんか) 優しくかったら脅しに応じるって、それ完全に脅す気満々じゃん、と心の中で小さくツッコミ。

ズルズルとひきづりながら無視していても女はまだギャーギャー騒いでいる。

「こつち来てからろくなもの食べてません！ お金無いです！ も  
う雑草食べる嫌です！ Noなんでスううううう！！！！！」

（あ、朝っぱらからうるっさいな……！）

周りの朝からの出勤や登校している人たちの視線が痛い。

それでもまだギャーギャーと叫び続けている女の子にいい加減苛  
立ちを覚えていた。

思いつきり振り替えると、裾を引っ張る手を振り払った。

「いい加減にしろっての！」

多少女の子に対して暴力的だったかもしれないが、これぐらいし  
ないと解らないんじゃないかと明菜は思ったのだ。

（ジャパニーズが優しいやつばかりとは限らない事を今教えておい  
てやろう！）

女の子は小さくキャツ！と声をあげ尻餅をついた。

「何なんだテメーはあさっぱらか……ら？」

明菜の言葉はそのまま続く事は無かった。

それは尻餅をついてフードがとれた女の子に目を奪われたのだ。

蒼い涙目の瞳に綺麗なブロンドの髪の毛。

長いカールのかかった髪の毛が良く似合っていてとても綺麗な少  
女だった。

## 4話・占い

「ひつく……ひつく……日本怖いトコです。人の温かみ欲しいです、マミーの所帰りたいでス」

道端でスンスンと泣き出した姿は、傍から見れば明菜が加害者。周りのひそひそという言葉や白い目が俺に冷や汗を覚えさせる。

(お、俺の方がどちらかと言えば被害者なんですけど!?)

「わ、解った! 占いでも何でも受けるから泣かないでくれ!」

女の泣ってホント卑怯だな……。と、明菜は目を細めてこの女に関わらないという選択肢を諦める。

「え!?! 本当ですか!?!」

そう言っただけさっきまでの涙はどこへやら。

満面の笑顔をコチラに向けてきた。

「……チキシヨウ嘘泣きかコラ」

「……私日本語あんま解らないです、でも男なら言った事やるべきです」

(く! ちょっと美人だからって調子乗りやがって!)

「良いからサッサと占い受けましょウ、騙されたと思って!」

「思ってたっていうか騙されたんだけどな!!」

渋々小さな机の前にある椅子に腰かけた。

「初めてのお客テスから一万円でOKデスヨ！」

「はア!? 一介の高校生に大金だぞオイ!!」

「じゃア千円でOKですヨ」

「適当だな!? 始めてって言ってたけど大丈夫なのかよ……」

不安そうにしている俺とは別に生き活きとした様子で外人少女はタロットを机に出していた。

紫色の少し古臭い印象のタロットカード。

準備をしながら少女は訝しそうに明菜を見つめる。

「しかし……貴方は凄く黒いモノに好かれルンデスね……」

「ア? 黒いのって……親父が良く言う怨霊的な奴か?」

「それで八、タロットカードを掻き混ぜて下さい」

「……テーマ話し振って来たくせにスルーしてんじゃネーよ!!  
話し聞けよ!!」

「準備出来たカラ無駄話しは終わりです、占いというノ手順が大  
事何です」

何か真剣な様子。

「わ、解ったよ……」

その真剣さに圧倒され、言われた通り机の上でタロットカードを適当に混ぜ合わせる。

他の人にも怨霊がどうか言われたのは初めてだったので少し気になったのだが、既に聞ける様子ではない。

(つつーか……こんなことしてる場合じゃねーんだけどな……。)  
学校は完全に遅刻、他の通行人達もとくに消え去っている状態。  
ため息をつきながらタロットカードを混ぜていると、目の前の外人少女から不満そうな言葉を発せられた。

「気持込めてやって下さいヨ！ 占いとは思いの強さデ色々と変わるですヨ！」

「あー！ うっせーな！ 解ったよ！」

こっちは客だぞ！ とか寧ろ占いでどんな気持ちを含めると？ と色々と言いたい言葉を胸にしまいながら俺は黙々とタロットカードを混ぜていた。

## 殺せ

(ん？ 今なんか聞こえたか？ 中々エグイ言葉が聞こえた気がするんだが……)

「ダーカーラー！ 気持を込めてって言うてるじゃないですか！」

また外人娘が怒った声をあげた。

「込めてるって！　なんか良い感じにやってるっつーの！」  
本当はボケーっとしてたんだが、何やら癪なのでそういうことにしておく。

（っっていうか殺せとか言い出したん実はこの女じゃねーか？　かわいい顔してるのにえっぐい事言うなー……）  
やっぱりどうでもいいことを考えながらやってしまっ明菜は適当な人間。

「OKですヨ」

その言葉で手を止めた。

掻き混ぜたタロットカードは良い感じに混ぜたんじゃないだろうか。

良い感じの気持を込めたんだからな。混ぜたって当然だろう。

掻き混ぜたタロットカードをしっかりと集めると、集めたトランプを机の上に置いた。

その姿は先程までの少女とは全く違って見えた。

真剣な様子に圧倒されてしまう。

「い、いきなり変なのとか出ないよな？」

つい情けない言葉が出てしまう。

さっきまでの『貴方死にます』の発言が突然リアルな気がしてくる。

そんな明菜の姿に少女は笑いかける。

「大丈夫ですよ、私の占いで最悪のカード何テ出ませんカラ」





## 五話・ドクロに魅いられて

「おいおいおいおい！！！！ 丸つきり死にそんなカードじゃねえか！！！！」

結局悪い結果になった事に明菜は呆れた表情をして見せる。

「つたく、ありえねエー……結局コレかよ」

明菜は不満を口に溢す。

死ぬとまで言われ、占いを無理矢理受けさせられ、それでこの結果なら不満も言いたくなる。

「おい、聞いてんのか？」

不気味なカードから外人少女の方に視線を向けた。

「……………」

不満をぶつけようと思っていた明菜だが、外人少女を見て言葉を失った。

外人少女は大きな瞳を見開き、顔が真っ青になっている。

【あ、ありえない】

外人少女が震える言葉で発した言葉は明菜が知っている言葉では無かった。

【このカードが出るわけが無い……死神のカードが……そんな、そんな……死神のカードが発動する前に呪文で止めないと！】

（な、何だア？）

少女は、そのまま何やら解らない言葉をブツブツと発し続けている。

その言葉の意味は取れないが、確実に悪い自体だという事は解る。明菜の事をまるで忘れたかのように少女はドクロのカードを凝視したままだ。

冷や汗まで流し、見た目でもオカシイ事は明白であった。

その姿は不安に思わせ、それでいて不気味にさえ明菜の目に映っていた。

(おいおいおい、ヤバインじゃねーのかヨ、な、なんなんだよ!?)

明菜は一步後ろに退く。

「動かないデ!!!」

「!?!」

突然の少女の大声に明菜はびたっ! と立ち止まった。

突然の声に明菜は焦る。

明菜が動かなくなったのを少女は目で確認すると、再びカードのほうへ視線を向ける。

そしてまたもわけのわからない言語が少女の口から続けられる。

殺せ

「ッ!

殺せ!

(こ、今度はなんだよ!?)

突然頭の中に鳴り響いた声に明菜の表情が強張った。

男を！ 女を！ 老人を！ 子供を！ 妊婦を！ 人を！ 善人を！ 悪人を！ 全てを殺せ！！

先程聞いた声が今度はハッキリと明菜を襲った。

頭の芯に響く老人のような老婆のような声に体が震える。

殺せ殺せ殺せ殺せ殺せエエエー！！

「う、うわあああああ！！！」

明菜は慌てて走り出した。

恐怖が身体中を駆け巡っていた。

「ま、待つて！」

後ろから聞こえる少女の声も気にせず明菜は必死で走っていた。

その場から離れたかったのだ。

あまりにも現実離れた声に、あまりにも知らない世界に。

がむしゃらに走る後ろ姿を追いかけようと、少女は慌てて立ち上がった。

少女は何故こうなっているのか知っていた。

机の上に出された一枚のカード。

ドクロの絵が描いてあった絵は。

消えていた。

そこには只の空白の一枚のトランプだけ。

消えたドクロが何処に行ったのか少女は解っている。

走り去っていく明菜の後ろを黒い影が空を飛びながら追いかけていたのをハッキリと見ていたから。

明菜は死神に魅入られた。

最高峰で最悪で最凶で全てを消し去る『死』のカード。

## 6話・日常と非日常

何処まで走ったか解らない。

荒い息を整えようと膝に手を付く。

数回の深呼吸の後、明菜は辺りを見渡した。

訝しげに明菜を見る通行人の人達。

先程の非現実な少女も、恐ろしい声も何も無い。

いつもの日常がそこに広がっていた。

(俺……疲れてんのかな?)

先程の声は只の疲労から来る幻聴だと明菜は無理に考える事にしていた。

そう思わなければ気持ち折れそうになっていたのだ。

「……ったく。何なんだよ！」

口で溢した独り言は明菜の苛立ちを示していた。

もう一度辺りを見渡し、溜息を溢す。

学校から大分離れてしまっている。

今から行っても昼ごろぐらいに学校に着くだろうか。

大遅刻だ。

(朝から遅刻するわ、変な女に会うわ、気持ち悪い幻聴は聞こえるわ……最悪な一日だな)

再び大きな溜息を吐いた後、明菜は学校へ行く為に歩を進める事にした。

辺りは静かな住宅街。

この時間帯に制服で歩いているというのも中々妙な物で、時々すれ違う主婦やサラリーマンに『不良め……』という視線で見られて



「しゅいませーん、ホームラン級打ったらバットがすっ飛んじやいましたー」

そんな事をいいながら数人の幼い子供たちが駆け寄ってくる。

「ガキが何で金属バットと硬球で野球やってんだコラアーーー！」  
色々な衝撃で明菜がつい怒声を飛ばしてしまう。

「だ、だって将来はプロリーグに行くから……」

「その年でどんな向上心だよ！ っていうかホームラン打ったのかよー！！ 最早向上する必要ネーよー！！」

そこでツハ！ と我に帰る。

（いや…… ココは硬球を投げれたガキの方を褒めるべきか？ っていやいやいや…… なにガキにムキになってんだ？ オリヤー……）

明菜の声にビビッて泣きそうになっている子供を見て冷静になる。

「わ、悪かったな、頑張って練習して二代目イチローにでもなってくれや……」

子供はツパー！ とスグに笑顔に変わると「うん！ 頑張る！」とだけ言っつて硬球と金属バットを持って公園に帰っていく。

（当り前のように金属バットを持ってやがる……なんちゅーガキだ）  
公園の出口はすぐ目の前だ。

明菜は学校へ急ぐ。  
明菜は不良では無い、遅刻してでも学校に急ごうとするのは寧ろ優等生な姿だ。

しかし明菜は少し不振に思う。

（今日幾らなんでも運が悪すぎネーか？ 考えすぎか……）  
そんな風に思っていると、突然目の前が真っ暗になる。

「う、うお!? な、なんだ?」

明菜の顔に飛びついてきたのは古ぼけた新聞紙。風に乗られてやって来たようだが明菜は困惑して気づいていない。フラフラと足が覚束ない。

それに合わせるかのように、大きな看板がギギツと音を立てる。

支えている錆びたネジがバツンと大きな音を立てて壊れる。支えを失った看板はゆっくりと前のめりに倒れていく。

倒れていく看板にフラフラと明菜が進んでいく。

「っだー! くっそ!」

顔に紙が張り付いているのが解り、力任せでその紙を剥ぎ取った。

同時にドオン! という大きな看板が倒れる音。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2211x/>

---

タロットDEATH!!

2011年11月10日04時42分発行